啼かぬ螢が　身を焦す（山城）

聲に現はれ　啼く蟲よりも
いはで螢が　身を焦す

○

風が戸叩けや　うつつで明けて
月に恥かし　我が姿（本唄）

夢で戸叩く　うつつで明ける
そこで狐が　こんと啼く（本唄）

叩く水鷄を　間夫かと覗けや
月に恥かし　我が姿

叩く水鷄に　また騙されて
起きて恥かし　我が姿

○

野邊の若草　摘み棄てられて
土に思ひの　根を遺す

土手の草　人に踏まれて　一度は枯れて
露の情で　甦る

韓信が　股をくぐつた　末見やしやんせ
踏まれた草にも　花が咲く

○

見れば見渡す　棹さしや屆く
なぜに我が戀　屆かぬぞ　（弄齋前後の流行唄）

石に立つ箭の　ありとは聞けど
なぜに屆かぬ　我が思ひ

墨田川さへ　竿さしや届く
なぜに届かぬ　我が思ひ

○

思ひ念力　岩でも通す
何んのそなたの　一重垣
思ひ通へば　千里が濱も
障子一重と　思ひ來る

○

志渡は好い町　乾を受けて
そよ〳〵と（讃岐盆踊唄）
八島嵐が　南を受けて
土佐は好い國
そよ〳〵と（土佐）
薩摩嵐が

早稲田よい所　目白を受けて
魔風戀風　そよ〳〵と（「俚謡正調」）

○

吉田通れば　二階から招く
しかも鹿の子の　振袖で（周防盆踊唄）
神田通れば　海老茶が招く
しかも下宿の　二階から（「俚謡正調」）

○

興作思へば　照る日も曇る
關の小萬が　涙雨
興作丹波の　馬追ひなれど
今はお江戸の　刀差し
興作佗びしや　今年はひとり
孫を相手に　麥を搗く（「俚謡正調」）

○

雨は降る〳〵　宮川止まる
負ふた子は泣く　日は暮れる

○曇る夕立つ　夕立つ晴れる
晴れる日がさす　虹が立つ　（『俚謠正調』）

俚謠の轉訛、模倣、飜案等を吟味し來たれば、その類似品を發見すること、容易である、以上は誰にも分り易いものを示したのである。

二一、教訓的の俚謠

俚謠に一貫したる生命は、思慕變愛の情緒にあるは論無けれども、猶ほ幾多の教訓歌あり孝道歌あり、俚謠子取材の範圍は極めて弘く、凡そ世相人事の表裏は、古人これを道破せざる莫しと謂ふべきなり。

親に會ひたか　立木を見やれ
嵐吹雪の　する夜さに
親の無い子を　見る度び思ふ
親は活きたる　神佛
他人恐し　闇夜は怖い
親と月夜は　始終も好い
親と親との　約束なれば
嫁かにやなるまい　戻るとも
月と日と　親と子供と　馴染と鏡
何時も見立てて　眼に厭きぬ
雨よ降り止め　お寺の側の
柿の樹蔭に　雉子が啼く

草鞋切れても　粗末にするな
藁はお米の　親ぢやもの

庄屋の内儀の　紅裏小袖
地下の百姓の　血の涙

人に物いや　油の雫
落ちて廣がる　何所までも

人の口には　戸が立てられぬ
流れ川には　堰ならぬ

人の振見て　我が振直せ
櫻花見て　色直せ

男伊達より　金より心
心さへ善けや　振やいらぬ

腹に實の無い　瓢箪さへも
胸に括りが　着けてある

仲が好いとて　禮儀を缺くな
圓といふ字も　角がある

上を思へば　限りが無いと
下を見て暮く　百合の花

及ばぬ者なら　手を出さぬが
遙か猿猴の　水の月

羽織腹巻棄て　筒袖巻いて
百姓するのも　國の爲

二三、歴史、人物の俚謠

史上の人物を詠嘆するもの、必ずしも俚謠には限らず、和歌にも俳句にも川柳にも漢詩にもあり、たゞ各その型式の異なると同様に、發想修辭上の異趣を味ふに過ぎざるなり。

妹脊山では　可愛いなおみわ
男取られて　殺されて
程も義經　靜の方に
私や九郎が　仕て見度い
平家の一門　皆蟹となる
私や悋氣で　鬼となる
蹙勝五郎　車に乘せて

曳くは初花　箱根山
お七火に死に　お初は乃
明日は誰が上　戀の果
佐倉宗吾の　子別れよりも
主と別れが　猶ほ辛い
清十郎殺さば　お夏も殺せ
生きて思ひを　さしよりも
捨てた其子を　また懷に
抱けと響いた　霜の鐘
闇の夜に來て　櫻を削り
赤い心を　墨で書く
西郷隆盛や　鰯か雜魚か

鯛（兵隊）に追はれて　逃げて行く

賤の緒玉巻　繰り言いふて
深く入鹿の　奥御殿

一夜會はねば　猶ほ深草の
せうしやうなりとも　顔見たや

野暮な屈原　汨羅に沈む
私や暦に　身を投げる

二三、地理、名所の俚謠

地理、名所の俚謠は、歴史、人物の俚謠以上に謠の數も多く、從つて傑作佳品も亦尠なからず、戀愛や諷刺や、俚謠本來の眞價を發揮して、他の平民文學を壓倒せるの概あり、殊に作意の自然にして虚飾無く、おしなべて原始的風格

ある、最も吟誦に叶ふ者といふ可きである。

急げ早よ遣げ　桑名の船頭
軈て熱田の　官に着く

○磯で名所は　大洗様よ
松が見えます　ほのぼのと

磯で曲り　松　湊で　雌松
中の祝ひ　松　男松

新潟女郎衆は　錠か　綱か
今朝も出船を　二艘止めた

金が敵か　大津の女郎は
雪駄直しが　一の客

新發田八萬石　荒地になろが
新潟通ひは　止められぬ
琉球へおぢやるなら　草鞋履いておじやれ
琉球は石原　小石原
主の爲なら　米山樣へ
跣足參りも　辛か無い
行こか參りまセウか　米山藥師
一ツア身の爲　主の爲
私や備前の　岡山育ち
米の生る木を　まだ知らぬ
私や長良の　船頭の娘
船も櫓も漕ぐ　櫂も漕ぐ

私や太田の　金山育ち
他に木は無い　松ばかり
忍路高島　及びも無いが
強て歌棄　磯谷まで
大磯今朝出て　程ケ谷宿り
花の藤澤　畫旅籠
五萬石でも　岡崎の殿は
城の下まで　船が着く
安藝の宮島　廻れば七里
七里七浦　七惠比須
安藝と黑田は　國は遠けれど
花のお江戸や　軒並べ

、三十五反の　帆を捲き上げて
蝦夷地離れりや　佐渡の島
三十五反の　帆を捲き上げて
那賀の港へ　走り込む
「木曾ぢや御嶽　甲州ぢや御嶽
西ぢや乗鞍　鎗が嶽
、夢で三廻り　來るかと待乳
會へば心も　隅田川
、見まショ見せまショ　浦戸を開けて
月の名所は　桂濱
港明神町の　四郎助稲荷
私が爲には　守り神

碓氷峠の　權現樣は
私が爲には　守り神
、關の五本松　一本切りや四本
後は切られぬ　女夫松
、關の岬には　蛇が居るさうな
大きな蛇ぢやげな　嘘ぢやげな
行こうか松前　蝦夷樺太へ
朝の別れが　無いとやら
、水戸を離れて　東へ三里
波に花散る　大洗
、須摩の浦には　今里の子が
吹くや青葉の　麥の笛

、此所は皂莢　樫の木坂よ
　　下に見ゆるは　畑の茶屋

二四、花鳥風月の俚謠

大和民族の特性に、優婉の美的憧憬の心あるは、山川花鳥の自然美に、化育せられた故であらう、繪畫に彫刻に、和歌に俳句に、すべての文學の題材に、花鳥や風月やの一番澤山あるのでも分る、彼等の美術心は天然の風色に養はれ、而して又天然の風光を歎美せんとするのである、思慕惡愛の情緒を披瀝する場合にも、想を花鳥に寄せ風月に托すといつたやうな、床しい淑雅を持つてゐる。

その優しさに囚はれた故かや、我が文學には、雄大だの、崇高だの、莊重だの、哲想あり、思索あり、所謂巨人的氣象を發揮した文學が無い、百合や、撫子や、女郎花風の、いはゆる「乙女式文學」であるといふ、かくいはれても、反抗の出來無い事實だから是非がない。

俚謠子が花鳥風月を如何やうに驅使したか、花鳥風月で讀まれた俚謠子は如何やうの色香を持つてゐるかは、次に示す歌の文句で知れ、いろは順で記す。

岩間隱れの　躑躅でさへも
　燃ゆる思ひの　色に咲く
意氣な苅萱　仇めく桔梗
　そして風情な　女郎花
意氣な梅が香　婀娜めく櫻
　赤き心の　桃の花
最ど松蟲　身は蟋蟀
　又も日ぐらし　啼くばかり

花は世上の　愛嬌者よ
野暮な人にも　香を送る

花を咲かせて　又散らすとは
心無いぞへ　春の風

花を散らしつ　柳を解いつ
解いつ散らしつ　春の風

花に焦れる　蝴蝶の夢を
悪や風めが　來て醒す

花の盛りを　訪ゑ來る蝴蝶
嵐に揉れて　遠ざかる

花に逢ひ初め　月夜に焦れ
雪にや待つ身の　眼も合はず

花よ咲くなよ　蕾で居れよ
咲いて小枝を　折られなよ

花の雫で　書く此文は
愛憐お方の　文机に

薔薇も牡丹も　枯れれば同じ
花でありやこそ　別け隔て

馬鹿になさるな　枯木ぢやとても
藤が絡まりや　花が咲く

星の數程　男は有れど
月と見るのは　主一人

解いて結んだ　柳の糸を
じらす心か　春の風

刺の中にも　花咲く茨よ
知らず手を出しや　怪我をする
散ればこそ　最ど櫻は　可愛たい者と
悟り乍も　辛い雨
濡燕　門を幾度も　通るは無事な
顔を見せにか　見に來たか
主の心と　空吹く風は
何所の何地で　止まるやら
瑠璃や淺黄に　咲く朝顔も
色は變れど　根は一つ
朧月夜に　あれ憎らしい
一人々々の　二人連

お月様さへ　夜遊びなさる
殿の夜遊びや　無理は無い
私ヤどうでも　あなたの儘ぢや
亂れ柳も　風の儘
僊が心は　蓮の花よ
泥氣離れて　清く咲く
僊とお前は　小藪の小梅
生るも落つるも　人知らぬ
僊が心が　竹にもあらば
破つて見せ度や　この胸を
私春雨　主ヤ野の草よ
濡る度毎　色を增す

可愛いらしいは　豌豆の花よ
花は小花で　濃紫
烏何んで啼く　長兵衛の屋根に
錢も持たずに　かほ〳〵と
風よ吹け吹け　木葉を乘せて
乘せた木葉の　落ちぬ程
玉川に　咲ける卯の花　岸白々と
雪か月夜か　置く霜か
竹に雀は　品好く止まる
止めて止まらぬ　戀の道
竹に雀は　仲好いけれど
切れば餌差しの　敵竿

立てば芍藥　座れば牡丹
歩む姿は　百合の花
月を枕に　旭を抱て　夢を見た
寶盡しの　月の夜にさへ　送つて貰た
見捨てられたよ　暗の夜に
面の憎さよ　彼の蟋蟀
思ひ切れきれ　切れと啼く
啼くな鷄　騒ぐな烏
明けりやお寺の　鐘が鳴る
泣くにや泣かれず　飛んでも行けず
心墨繪の　時鳥

名殘惜氣に　見かへる顏に
露か涙か　朝櫻
無理に蕾を　咲かせた罰で
花の春風　他所に吹く
娘島田に　蝶々が止まる
蝶々とされや　花ぢやもの
梅も櫻も　牡丹も厭よ
儂は返事を　きくが好い
梅の匂ひを　櫻に込めて
枝垂柳に　咲かせ度い
梅の香りを　櫻に込めて
意氣な欅に　咲かせ度い

梅に絡まる　柳の糸を
解きに來たのか　春の風
黃鳥を　留めてしつぽり　樂む梅を
そつと見てゐる　野暮な月
美しく咲く　彼の薔薇さへも
花に隱れた　刺を持つ
野邊の茅花も　時節が來れば
人の眼に附く　花が咲く
山で赤いのは　躑躅に椿
咲いて絡まる　藤の花
こぼれ松葉を　あれ見やしやんせ
枯れて落ちても　夫婦連れ

手の届く　枝にや花無し　花ある枝にや
取る可らずの　禁止札
手の届く　梅の梢を　折らずに置いて
届かぬ櫻で　苦勞する

明の鴉と　鷄や憎い　眼を覺す
可愛い男の　よつに萎れる　牽牛花さへも
朝咲いて　露に一夜の　宿を貸す

咲いた櫻に　手は届けども　見て戻る
餘所の花なりや
咲いたが花やら　咲かぬが花か
咲くを待つのが　花の花

咲いた花なら　散らねばならぬ
恨むまいぞへ　小夜嵐

櫻三月　菖蒲は五月　梅の花
咲いて年とる

樣と儂とは　山吹育ち
花は咲けども　實は生らぬ

君は野に咲く　薊の花よ
見れば優しや　寄れば刺す

君は吉野の　千本櫻
色香好けれど　きが多い

枝垂柳に　櫻を咲かせ
梅の匂を　持たせ度や

尻に敷かれる　莚も時節
蘭さへ花咲く　夏がある
忍ぶ戀路は　誰白梅の
色にや出さねど　香に洩るる
人がいひます　そなたの事を
梅や櫻の　とりどりに
紅葉蹈む鹿　憎いといへど
戀の文書く　筆となる
千里胡沙吹く　風さへ絶えて
淋し馬子唄　冬の月
粋な花だが　彼の木は高い
所詮私の　手にや折れぬ

好いた水仙　好かれた柳
心石竹　氣は紅葉

二五、皮肉味、諷刺味の俚謠

日本の文學で、皮肉味と諷刺味とを發揮したものに「川柳」がある、皮肉や諷刺や、或る一點の急所を狙うて、聯想の興味を遣り、氣呵の興趣を起さすものは、散文では不可能である、それで僅に十數文字の川柳の如きが、寸鐵殺人的辛辣を感じしめる。

併し、天眞流露の野趣と　奇警飄逸の輕快とで、皮肉の神髄を現し、諷刺の骨髄を傳へてゐるものに「俚謠」のあるを知らねばならぬ、皮肉と諷刺との天籟の眞味、渾成の妙味は、我が俚謠子獨占の壇上である、川柳に優越し、他の文學の企及し能はざる別個の趣味は、試みに次の俚謠を見て知られよ。

年が寄っても　耄碌しても
嫁に杓子は　渡されぬ
添うて八年　子も有る仲ぢや
嫁に杓子を　渡さんせ
愛憐し我が子も　嫁取りや憎い
嫁は前生の　敵やら
伊達を放いても　自慢を放くな
自慢放くよな　器量で無い
大小差したる　旦那さんよりも
似合ふた百姓の　殿が好い
旦那様より　奥様恐い
白眼黒眼で　睨まんす

こちの旦那殿は　傘育ち
世間廣がり　内窄み
夫婦喧嘩は　三日の月よ
一夜々々に　圓くなる
金が有るとて　高慢振るな
佐渡ぢや　蚯蚓が　糞に放る
心性根は　直せば直ほる
顔の痘痕は　直りやせぬ
可愛い子供を　寺へは遣るな
根性曲りに　仕て戻す
鉦を叩いて　佛に成らば
石田鍛冶町や　皆佛

寢ては念佛　起きては勤行
死んで佛に　成り度さに

猫は鼠捕り　鷺泥鰌晩む
今の坊主は　後家にらむ

地獄極樂　此世に御座る
死んで地獄が　あるものか

千部萬部の　經文よりも
私や一分の　金がよい

赤い湯卷に　迷はぬ人は
木佛金佛　石佛
お醫者の背中に　雀が留つた
留まる筈だよ　藪ぢやもの

名ばかりお醫者

お醫者〳〵と　踊りが好きよ
匙が嫌ひで
醫者の藥禮と　御苑の櫻
取りに行かれぬ　さき次第

○女庭訓

讀んでも見たが
○○するなと　書いちや無い

論語讀み〳〵　吉原通ひ

曰くは　格子の　内にある
有り相な樣でも　無いのはお金
無さそに見えても　有る氣兼
石になつたは　昔の事よ
今ぢや娘が　金になる

意氣地張りのといやいふ者の
矢張眼に附く　金時計
小指切ろとは　當座の事よ
金が無くなりや　手迄切る
厭で幸ひ　好かれちや困る
外に好いのが　ある私
厭で幸ひ　好かれちや困る
僕は次男で　家が無い
輜重輸卒が　人間ならば
電信柱に　花が咲く

二六、語呂、地口、比喩等の俚謠

皮肉、諷刺ほどの傑作は無いけれど、語呂、地口、輕口、比喩、反語、對句等の言語上の趣味あるものも尠くは無い、俚謠本來の性質からいふと、斯る變體的句調は、喜ばしい現象では無い、「心の有の儘を素直に言ひ現はす」だけで滿足出來ず、只管淺薄な措辭の工夫を凝すことゝなつた。

古人の作は、流石に邪氣が無い、罪が無い、素直に出來てゐる、而も言外無限の面白味がある、所が古人の作に、語呂、輕口風のものは稀で、この種の俚謠は、彼の「都々一」發生以後、近代の新作に多い、中には三文の價値も無いものもあるけれど、比較研究の便に供へたいといふのが本稿の目的であるから、態と棄て無かつたのである。

裏の窓から　蒟蒻玉投げて
今夜來よとの　知らせかや
思ひ廻せば浮世は鏡
笑ひ顔すりや　笑ひ顔
昔や縮緬帶　縮緬襷
今ぢや繩帶　繩襷
昨日北風　今日南風
明日は浮名の　たつみ風
私の心は　萱葺き家根よ
かわら無いのと　察しやんせ
思ひ思へば　儂や思ふ程
思ひに思ひが　增す思ひ

思ひまひぞと　思ふも思ひ
なぞと思ふも　亦思ひ
思ふまいぞへ　もう思はぬと
思へど思はず　思ひ出す
思や濟みます　もう思や濟む
諦められぬと　思や濟む
思ひ出すまい　とは思へども
思ひ出すよな　事ばかり
思ひ出すよな　惚れよぢや淺い
思ひ出さずに　忘れずに
無理をいふのが　私の無理か
無理をいはせる　主が無理

無理に歸るを　無理から止めて
無理と知りつつ　いふた無理
忘れられられられられ泣くも
思ひ出す出す　此記念
諦めませうよ　どう諦めた
諦められぬと　諦めた
惚て惚られて惚られて惚て
惚て惚られた　事が無い
可愛いがられて　又憎まれて
可愛いがられた　甲斐も無い
可愛いがられて　がられてがつて
がつてがられた　事も無い

逢はねば逢はぬで　苦勞もするが
逢へば逢ふたで　又苦勞
斯うすりや斯うして　斯う成る事と
知りつつ斯うして　斯う成つた
さぞやさぞさぞ　さぞ今頃は
さぞやさぞさぞ　さぞやさぞ
磯の鮑を　九つ集め
ほんにくかいの　片思ひ
只ッた二つの　壓に陷り
今ぢや諸方に　穴だらけ
櫛は緣切り　簪や形見
指輪は當座の　緣繫ぎ

片手剃刀　片手に砥石
切れても合はせて　下さんせ
遣つた手紙が　一々胸に
利く筈其字は　釘の折
送る文をば　二重に封じ
中をひとへに　願ひます
主は今頃　覺めてか寐てか
思ひ出してか　忘れてか
人は一寸見て　一寸惚するが
私は能く見て　能く惚る
ほれた〳〵よ　何にヨ見てほれた
馬が小便して　地がほれた

抓りや紫　喰ひ附けや紅よ
色で固めた　此の體
臺の肴を　骨まで舐り
思ひ置く事　さらに無し
早く逢い度い　お顔が見度い
話聞き度い　聞かせ度い
苦勞する墨　身は細筆の
主に命も　かけ硯
竹に育てし　雄竹に雌竹
早くふうふと　ならせたい
竹の切口　溜りし水は
澄まず濁らず　出ず入らず

此方立てれば　彼方が立たぬ
兩方立てれば　身が立たぬ
貴郎一人の　私ぢやけれど
私一人で　無い貴郎
主は手管で　迷はすけれど
私や實意で　迷はせる
惚れたは私が　重々惡い
可愛いといつたは　主の罪
憎いお前に　私は惚て
可愛いお方を　つい欺す
鈴の都か　自轉車電車
豆屋豆腐屋　號外屋（俚謠正調）

二七、俚謠の滑稽趣味

滑稽文學の缺乏

その何んの故にや、すべての文學が、悲觀の傾向を帶たる分量多くして、滑稽趣味を發揮したる者極めて少量なるは事實である、殊に我が大和民族の產出したる文學を見て、一層この事實を知る、古きは紀、記の古典より、新しきは現下最近の文學的產物を見ても、如何に滑稽文學の乏しきかゝ分る、上古神代の歌謠、萬葉の和歌には、豪放の氣象、樂天の思想の詠歎せらるゝあつて民族固有の特性の發露を認められざるにはあらねども、漢學及び佛教思想の渡來するや彼等の血管には厭世的、悲觀的血液を盛られ、眞率素朴の習俗一轉して、幽玄深邃の詩想を育生せられたると同時に、彼等の思想は詩歌といはず、散文といはず、おしなべて悲調の臭味を帶びざるは無きの現象を示すことゝはなつた。

國民的文學の最も旺盛を極めたる江戸時代は、德川治政の平和、士民生活の餘裕あつて、勢ひ樂天的文藝の產出すべかりき時運には屬すれど、而も傳稱に價するほどの產物を遺さず、散文には僅に三馬、一九の徒輩出して時代相應の淺薄露骨の滑稽文學と、一方短詩型類には狂歌、川柳等に皮肉、諷刺、滑稽の輕文學を產出した、傳稱に價するほどの者では無いとはいへ、斯かる樂天的興趣は、我が民族固有の特性の自然の發露なのである、いつかは出現せでは止まざる特殊の一の發現であつたのだ。

俚謠にも滑稽趣味乏し

我が二十六文字詩の、俚謠子の發生も、三十一文字の和歌と同じく、本來の性質は思慕戀愛の情緒を歌ふ所にあるけれど、その外猶ほ幾多の異種異色の詞句の傳唱せらるゝは、眼に一丁字も無き者が、自個の感想を率直に唱つたからであらう、而もそれ等の謠に却つて眞摯の氣人に逼り、率直の情、甚だ愛す可き者がある。

隆達、弄齋から發達して、修辭の圓熟渾成した「投節」に至つて、文字の優婉、思想の悲調、和歌と若干の徑底ありやを思はしめ、濶達、洒落の元祿時代の俚謠だに、猶ほ思ひの儘ならぬ戀をかこつ女々敷い悲調が多く、下つて「潮來」、「よしこの」、「都々一」と推移して、只淺薄露骨の情歌的低趣味を謳歌して俚謠の特色を墮落せしむることゝなつた。

俚謠の實質は、野趣と眞率の天眞飾らざる所にあるのだけれど、古來傳はる多くの謠は悲觀か悲調か、さなくば所謂君士口にするを憚るといふ淫靡醜惡の俗聲ならぬはない。

滑稽笑可味の俚謠

乍去、墨田川から砂金でも拾ふの心持で、多年探査採集した結果は、滑稽趣味の甚だ乏しからぬを知るを得た、俚謠子ならではいふを得ざる滑稽可笑味の

趣味は、次の實例を見て知られよ。

多くは古味古調あるを選らび、近代的の野卑なるは避けたり、只比較のため少しばかりは新派のも並記することゝした。

惚て見る目は　糸より細い
恪氣する目に　角が立つ
惚て居れども　いひ出しや辛い
何うか先方から　言て賴む

○見掛けばかりに　つい惚込んで
辛い目を見る　唐椒
泣いて悔んで　帶買て貰ろて
質に置かれて　流された

内の阿姉さん　粉を引きや眠る
團子食ふ時や　眼が光る
私やだんない　團子屋の子でも
團子食はせず　貰やせず
彼の子好子ぢや　牡丹餅娘
黄粉附けたら　猶好かろ
彼の子氣の毒　白齒で身持ち
聞けば殿御は　旅の人
彼の子氣の毒　背中に虱
聞けば着替が　無い相な

○恥かしいぞへ　牡丹の花を
見に行く私は　鼻が獅子

彼の子何故やら　私よ見て笑ふ
私も見て遣ろ　笑ろてやろ
喉へ出る程　唐茄子お芋
食べて見度いが　身の願ひ
泥に汚れて　猶更好いは
田植戻りの　妹が顔
儘にならぬと　お櫃を投げた
其所ら邊は　ままだらけ
思ひ切れとて　五合桝投げた
之れが一生の　別れます
お前三度の飯や　お香々に茶漬
朝は朝漬　夜は菜漬

頭茶瓶でも　片鬢無ても
茶畑二丁も　有るが好い
お大盡衆は　大皷を叩く
私や貧乏で　鍋叩く
風が笛吹けや　木の葉が踊る
狸浮かれて　腹皷
鬼が餅搗きや　閻魔が捏る
傍で御地藏が　嘗たがる
石の地藏さん　頭が丸い
烏留まれば　投島田
關の地藏に　振袖着せて
奈良の大佛　聟に取ろ

富士の山をば　鳶が攫ふ

奈良の大佛　蟻が曳く

昨夜見た見た　大きな夢を

奈良の大佛　蟻が曳く

京の大佛に　帆柱持たせ

鯨釣り度い　五島浦

坊さん頭へ　飯粒つけて

章魚の丸壽司　よく出來た

寺の門口　蜂が巣を懸て

坊主出りや　螫す　這入や螫す

西の山見よ　跛者が通る

笠が見えたり　隱れたり

男持つなら　跛者を持ちやれ

跛者踊るよで　面白い

男持つなら　片目を持ちやれ

覗見る時　手がいらぬ

鈍な男に　緞子の羽織

着せて眺めりや　猶鈍な

男鰥夫と　南瓜の蔓は

裏や背戸やを　這ひ廻る

時は世に連れ　世は時に連れ

今の若い衆は　嗅を連れ

守は守連れ　子は子供連れ

大きな姉さん　男つれ

音頭取る子が　橋から落ちて
橋の下から　音頭取る

ままよ〳〵と　半年暮す
後の半年　寝て暮す

お粗末なれども　私の男
どうも他人には　貸しにくい

店にや親指　奥には小指
外にや人指し　指がねる

船ぢや寒かろ　これ着てお出で
私が部屋着の　此褞袍

裸體ぢや行かれぬ　着て行かしやんせ
背戸の木小屋に　菰がある

裸體で寝るのは　惚れたので無いよ
お前の虱が　移るから
背中を叩かれ　新粉程腫れた
これも悋氣の　塊乎
ぽんと叩かれ　モ一つ頼む
其所らが虱の　集會所

人口噲炙の唄、新作の唄

今朝も今朝とて　柱で頭
あいたかつたと　眼に涙
可厭ぢや〳〵と　畑の芋は
掉頭振り〳〵　子が出來る

食べても〳〵　厭き無い者は
米の飯に　親の脛
お前死んでも　寺へは遣らぬ
焼いて粉にして　酒で呑む
呑みやれ大黒　歌やれ恵比須
殊にお酌は　福の神
下へ手な藝者と　跛の車夫は
乗せたり曳いたり　轉んだり
燐火の明りで　寝顔を眺め
吸付煙草の　一人笑
富士の山程　千兩箱積んで
それを傍から　使ひたい

宵にや欺され　夜中にや待たされ
朝の鐘には　突き出され
團扇使ひも　お客によりて
煽ぎ出すのと　招くのと
打ッちやッてお置きよ　寐た中なりと
楽な夢でも　見させ度い
聞いて恐ろし　顔見て恐し
添うて優しい　薩摩さん
書生〳〵と　輕蔑するな
明日は太政官の　御役人
汽車の窓から　顔出して見たら
電信柱が　飛んで行く

金の茶釜が　抔いふ奴は
家にや土瓶の　蓋も無い

歌の字の唄

歌ひなされや　お歌ひなされ
歌で御氣量は　下りやせぬ
歌へ〳〵と　急き立てられて
歌も出ませぬ　汗が出る
歌は歌ひ度し　歌の數は知らず
歌の師匠さんと　寢て見度い
歌の節々　所で變る
知らで咎めて　恥掻くな

歌の上手なのは　姫路の御家中
殊に殿さん　雅樂頭

酒の字の唄

醉ふたお客と　匏の酒は
呑めば其儘　横になる
顔見たばかりで　氣が濟むならば
酒も樽見りや　醉であらう
酒を呑まんせ　一合や二合は
三合までなら　買て呑まそ
呑めよ食へよ　一寸先き暗よ
下戸の建てたる　倉は無い

倉を建てよと　上戸となつて
老の旅路を　菰被り
酒は呑み度し　酒代は持たず
酒屋看板　見て戻る
お酒呑んでも　叱るな爺
叱る爺も　呑みたがる
内のお父さん　虱か蚤か
のみはのみぢやが　酒呑みぢや
腹が立つ時や　茶碗で酒を
呑んで暫く　寝りや直る
酒に酔た〳〵　五勺の酒に
酔ふて管巻きや　猶ほ可愛

お酒呑む人　心から可愛
呑んで管巻きや　猶ほ可愛
お酒呑む人　心から可愛
呑ま無けや呑むより　猶可愛（竹山人戯作）

二八、文字工夫の俚謠

俚謠流行の盛んなる結果にやあらん、文字を弄びて、措辭の工夫に腐心する者生じ、一種の文字工夫の俚謠現はれたり、多くは後世の産たるはいふまでも無く、眞摯ならずと雖も、中にその才華潑溂、奇智の發揮されたるものあり、輕視すると否とは、人の自由たらんのみ。

戀といふ字を　分析すれば
糸し糸しと　言ふ心

○君を戀の字　分析すれば
心變りか　文がない（俚諺正調）
○松といふ字を　解剖すれば
公と木との　差向かひ
松といふ字は　開花の文字よ
當世流行の　公と木
妾といふ字を　分析すれば
家に波風　立つ女
法の妙の字　解いて見れば
少い女の　縺れ髪
意見の意の字を　分析すれば
義理を立てよと　曰ふ心

色のいの字に　能く似た姿
二人巫山戯て　居る所
迚も添はれぬ　緣なら一層
主といふ字の　逆に行く
主は二十一　私は十九
しじふ仲好く　仕て見度い
呑といふ字を　分析すれば
二人口とは　旨い酒
面白いのは　二十歳を越えて
二十四の頃　三の頃
天の星さへ　數へて見たら
九千九つ　八つ七つ

三更四更の　夜も更け渡る
最早や五更か　明けの鐘

孝といふ字に　武装をすれば
忠といふ字や　無いかいな（俚謡正調）

孝といふ字を　分析すれば
老をいただく　子で御座る（俚謡正調）

立てて見度いよ　米藏一つ
二つ三つ四つ　五つ六つ（俚謡正調）

一重櫻が　九分まで咲ば
八重の櫻が　二分開く（俚謡正調）

二九、禪味ある俚謡

禪的趣味の賞美されてより、日本の文藝に、禪味無きは莫し、何物にも多少の禪的趣味を加味す、俳句尤も然り、甚だ乏しけれど我が俚謡子にも禪味あるものなり。

波の音　聞くが厭さに　山奥住ひ
又も煩い　松の聲

更けて月漏る　埴生の小屋も
聞くや松風　浪の音

朝な夕なに　消息る者は
峰の松風　鹿の聲

伽羅を炷かせた　昔にかへて

今は嵯峨野の　夕蚊遣
峰の松風　妻戀ふ鹿の
訪ふや秋の夜　庵住ひ

三〇、和歌脫體の俚謠

あらゆる文學には、それ〴〵共通の脈絡と關係とあり、漢詩の和歌に飜案せられ、和歌の俳句に轉訛したるもの抔、實例甚だ多し、俚謠の和歌俳句より脫體したるものもあり。

足曳の　山鳥の尾の　長々し夜を
どうして一人で　寢つかれう
一人寢る夜の　その明くる間は
いかに久しき　物思ひ

難波潟　短き蘆の　節の間なりと
どうして逢はずに　過されう

三一、二十六字詩の色いろ

四句二十六字詩の民謠が「隆達」に起り、爾後、數百年の間に、種々樣々の節調を以て、諸國に流行したり、「日本歌謠類聚」、「諸國童謠大全」には、地方々々に謠ひ傳へられた多くの民謠が收められあり、茲には多數の唄の中より人口に膾炙したる代表的一首を拔き三十餘種を列記せんと欲す。

○隆達節

夢になりとも　情は善いが
人の辛さを　聞くも厭や

○弄齋節

文は遣りたし　我が身は書けず
物を言へかし　白紙が

○投節

雨の降る夜は　一入床し
何時におろかは　無けれども

○伊香保節

花になりたや　芳野の花に
咲いて亂れて　下露落ちて

○鹿兒島節

滋賀の漣　立つとも儘よ
霞隠れの　舟床し

○薩摩節

親は他國に　子は島原に
櫻花かや　散り〳〵に

○しようがゑ節

逢はで寢る夜は　夢こそ頼め
打つな妻戸を　夜の雨

○有馬節

しんきしの竹　やれすのすだれ
かけて思ふは　我れ一人

○加賀節

飛鳥川とは　夢々知らで
かたり捨てたよ　恥かしや

○のほほん節

色に出さねど　我が身の戀は
袖の涙で　人ぞ知る

○潮來節

潮來出島の　眞菰の中に
菖蒲咲くとは　露知らず

○よしこの節

儘よ三度笠　よこちよに被り
旅は道連れ　世は情

○歌澤節

淀の車は　水ゆゑ廻る
私や悋氣で　氣がまわる

○都々一節

止めばそれかと　ついぃ欺されて
エエも自烈體　蟲の聲

○木遣節

目出度〳〵の　若松さよ
枝も榮える　葉も繁る

○田植唄

今年や豊年　穗に穗が咲いて
道の小草に　米が成る

○糸取唄

糸を取るなら　斑なく細く
可愛い男の　夏羽織

○茶摘唄

宇治は茶所　茶は縁所
娘遣りたや　婿欲しや

○馬子唄

箱根八里は　馬でも越すが
越すに越されぬ　大井川

○船頭唄

船頭可愛いや　穩戸の瀬戸で
一丈五尺の　櫓が撓る

○盆踊唄

揃た〳〵よ　踊子が揃た
稲の出穂より　能う揃た

○子守唄

ねん〳〵ころ〳〵　寢る子は可愛い
起きて泣く子は　面憎い

○相撲甚句

櫓太鼓に　偶と目を覺まし
今日は何の手で　投げて遣ろ

○木曾節

木曾の御嶽さん　夏でも寒い
袷遣りたや　足袋ヨ添へて

○追分節

帶も十勝で　そのまま根室
落つる涙の　幌泉

○松前節

忍路高島及びもないが
せめて歌棄磯谷まで

○流山節

鯉の瀧登り何に見て躍ねる
水の出花のなァ態ヨ見てはねる

○磯節

二十五反の帆を捲き上げて
往くよ仙臺イソ石の卷

○土佐節

土佐はよい國南を受けて
薩摩おろしがそよ〳〵と

○米山節

往こか參らんせうか米山藥師
一つ身の爲めササ主の爲め

○琉球節

琉球へおじやるなら草鞋履いておじやれ
琉球は石原小石原

○新潟節

新潟出る時や涙で出たが
今ぢや新潟の風も可厭

○名古屋節

此所は中島七里行きや桑名
命預けた主もある

第四篇

俚謠の傑作

昔から傳はつてゐる數へ盡くせぬ多くの俚謠の中から、私が朝暮吟誦して厭くを知らざる者のみを擧示します、近世墮落の俗調は採らず、文祿、慶長の「隆達」「弄齋」より、元祿、享保を經て、文化、文政の頃に至るの間、未だ「都々一」の發生せざる、數百年間の流行唄中より、俚謠的型式を供へたる四句二十六字詩の、所謂古味古調ある者のみを精選したのです、諸君も亦、これを十唱し百唱し、千唱し、更に萬遍吟唱して、滾々盡きざる千古絶唱の俚謠子眞成の趣味を味はれませうならば、幸甚です。

三二、俚謠に現はれたる戀愛の情緒

俚謠子本來の性質が、男女戀愛の情緒を披瀝し、思慕相愛の心緒を唱ふにあるので、自から戀愛を吟誦したるものに傑作が多い、殊に女性の心理の大膽に濃厚に現はれてゐるものに一層優秀の傑品がある、試みに年代を追ふて唄を上げ、次に駄評を添へて見ん。

○

夢になりとも　情は　好いが
人の　辛さを　聞くも　厭

この唄「隆達」の最初に出てゐる、所謂「都々一」や「情歌」の元祖の唄だと思つて宜しい。

一誦して、戀愛歌といはんより、寧ろ道德的、道話的だといひたい、同情を

唄つた唄は、この外に澤山あるけれど、「隆達」に出てゐるので、その頃はこんな唄が唱はれたのかと、鳥渡首を傾げさせられたのである。

この唄と並んで、

寢ても覺めても　忘れぬ君を
焦がれ死なぬは　異なものぢや

といふのがある、この唄こそ慥に戀愛歌である、女が男を戀ひ焦がれた心を唱つたものだが流石は古調だけあつて、何所となく悠揚な感じがする、近世の女性であつたら、『焦がれ死なぬは、異なものぢや』などと、落ち着き拂つてはゐられない、『異なものぢや』の一句、特に古調の異な響きがする。

古味古調を帶ぶる俚謠の特色は、その眞率素撲に在る、明治の「都々一」のやうに野卑に且しつッこくない所にある。

深山清水は　底から澄むが
君の心も　底からか
山で小柴を　しむるが如く
今宵其樣と　ゞあかす
眞の闇にも　迷はぬ我れを
あァ扨其樣の　迷はする

といふが如き、いづれも「隆達」前後の組唄の唄だが、その眞情を吐露するに虛飾なく、深山の清水だの、山の小柴だの、眞の闇だの、日常目に見る所の自然や、物質の單純な事象を比喩に取つて、自個の情緒を述ぶるなど無邪氣愛すべきものがある、同じく「組唄」の中に、

比良や小松の　朝通ひ
褄が濡れ候　磯打つ浪に
門に立ちたは　八文字樣か

夜風身の毒　内御座れ
七里小濱のな　砂の數程思へ共
縁が薄いやら　添ひもせぬ
山は雪じや　麓は霰　里は雨
裏へ廻るも　其樣故

といふやうな、すべて胸の思ひを、物に喩へて現はさうとする所に、技巧の幼稚が見えると同時に、天眞無色の原始的古味古調が味ははれるのである。

○

一歩「弄齋」の時代に進んで來ると、

思ひ棄つるな　叶はぬとても
縁と浮世は　末を待て
よしや歎かじ　叶はじとても

定め無きこそ　浮世なれ
花は散りても　又春咲くが
君と我れとは　一盛り
住めば浮世に　思ひの增すに
月と入らばや　山の端に
離れ〳〵の　あの雲見れば
明日の別れも　あの如く
よしや今宵は　曇らば曇れ
とても涙で　見る月を

と、いつたやうな、悲觀の思想に蓋はれてゐるのが眼に附く、戀に對し、男に對し、諦めの意を詠んでゐるのが面白い、それに、修辭の進境を示してゐることは、「隆達」「組唄」と讀み比べて分る。

斯く悲觀の唄の中に、

いらぬ煙管の　羅宇が長うて
　　様と寢た夜の　短かさよ

といふやうな、煙管の羅宇が長いといふ比喩が、今日の我等には多少の滑稽味を覺えしめるのである、けれど、この唄とても、詠んだ本人は、一生懸命、血を吐く思ひで唱つたかも知れぬ。

○

古い俚謠では、「諸國盆踊唱歌」の中に傑作が澤山にある、唄の數が多いので自然傑作も多いのであらう。

掛けて好いのは　衣桁に小袖
　　掛けてたもるな　薄情

この唄は「諸國盆踊唱歌」の中にある寛永年間、伊勢から流行り出したので

ある。

『掛けてたもるな』の『る』は、唱ふ時には『ん』と鼻へ出した方が響きが好いやうだ、一首の意味は、殆んど説明を要しないほどに明白である、二句と四句との對照が何んともいへぬ情趣を味ははしめる。

思ふに、伊勢はその頃も遊廓の盛んな所から、薄情な漂客に向つて、遊女が怨みの心を讀んだものであらう、文字の美なる、「隆達」「弄齋」から進歩する數等、俚謠の上乘なるものである。

男の薄情を怨じて、

思ひ切らしやれ　もう泣かしやんな
　　様の戀路は　薄御座る

といふのもある、「弄齋」時代は、締めるといふ思想が唱はれたのに、今では、男を怨むといふに至つた、怨恨の情緒は戀愛の進歩である、俚謠子も單純から

複雑にならざるを得ぬ。

月は東に　昴は西に
いとし殿御は　眞中に

句調の好い唄である、昴は宵の明星の異名、可愛男を月と星とに見較べて見る所に面白さがある。

樣の寢姿　今朝こそ見たれ
さつき野に咲く　百合の花
いとし殿御の　目元のしほを
入れて持ちたや　鼻紙に

いづれも「月は東に」に同樣の意を詠んだ唄、「樣の寢姿」の一首、百合の花にも讓らぬほど際立つて綺麗な唄である。

○

それからまた次のやうな優婉の思想を唱つたのもある、

情無いぞや　今朝立つ霧は
歸る姿を　見せもせず

餘韻嫋々とは、こんなのをいふのであらう、これと同じ意の唄で、

山が高うて　彼の家が見えぬ
彼の家可愛や　山憎や

といふのがある、この唄は「時代知らずの唄」で、流行の時代は分からないけれど、一誦して古調たるを知る、思ひを寄する情人に焦るゝ心地を、山高くして愛する人の家が見えない、何んと憎い山ぞと、熱情の籠る所を、淡々無邪氣にいつたのが手際である。

一口に戀愛とはいつても、戀愛に對する心持ちは、それ〴〵に異つてゐる、淺深あり、厚薄あり、淡泊、濃厚、樣々の心理が種々の形を變へて現はれる。

思ふ殿御が　野邊御座るなり
涼し風吹け　雨降るな

抔は、誠にやさしい女の心が現はれてゐるけれど、一歩誤つて失戀又は、破戀の女になると、

狭い廣いと　我が寐た部屋を
今は他所目で　見て通る

の如き、怨恨の恐る可き心理が現はれてゐる。

さうかと思ふと、「盆踊唱歌」の古調にも、

おれが晒すは　布ではないぞ
仇な男の　心を晒す

樣のやうな〳〵　瓢簞男
川へ流して　鯰と添はしよ

樣は流れの　瓢簞男
ぬらりくらりは　ようもよも
博奕打たしやる　大酒呑みやる
わしが布機　無駄にして
いなしよ〳〵と　思ふた中に
太郎が生まれて　いなされぬ
心短氣な　男を持てば
胸に早鐘　撞く如く
樣よ〳〵と　焦れて來たに
樣は啞かよ　物いはぬ
月は重なる　腹な子は太る
生木筏で　きが浮かぬ

といふやうな、あど氣ない滑稽なのもあつて、一誦破顔を禁じられないのであるが、幾度吟誦しても飽くを知らないのは、

戀に焦れて　鳴く蟬よりも
鳴かぬ螢が　身を焦す

この唄人口に膾炙して知らぬ者なし、蟬と螢とを比喩し對照して、戀に對する情緒を唱つた所に非凡の手腕を見る、理窟に入り易いが理窟に墜ちない、この唄は端唄や、淨瑠璃の文章などにも屢々採用されてゐる、この唄の飜案かとも思はれるのは、「古今百首なげぶし」に、

聲に現はれ　鳴く蟲よりも
いはで螢の　身を焦す

といふのがある。

思想の進歩か、但しは戀愛の發達か、

添うて添へない　殿御もあるに
添はで思ひの　增すもあり

といふ氣取つた唄があるかと思ふと、

こなた思うたら　これ程痩た
一重廻りが　三重ほどに

のやうな素直な唄もあり、好き好きは人さまぐではあるけれど、

人目思はず　人さへ知らにや
織つて着しよもの　竪縞を
夢になりとも　逢はせてたもれ
夢に浮名は　立ちやせまい

といふやうな唄は慥に傑作だと思ふ。

○

「時代知らずの俚謠」といふのは、その流行の時代の明かならぬをいふのだが、語格や調子から推察して、「弄齋節」の以後、「潮來節」の以前の時代に屬するかのやうに思はれる、「盆踊唄」と能く似た唄が澤山にあるので、やはり古味古調あるものだと思はしめる。

來いといはれて　その行く夜さの
足の輕さよ　嬉さよ

惚れた男から『今夜は屹度お出でよ』と、いはれて、急いで行水を遣ひ、浴衣も着替えて薄化粧、夕飯の膳についても箸を取る氣もせず、『お蝶や、お前どうかしたの、いつにないそわ〳〵してゐるぢやないか』と、たしなめられて、赤い顏、好い加減に母の前をつくろうてさて隣の村へと急ぐ、お蝶さんの、あの嬉しさうな顏はいなア。

來いといひなされや　儂や何處迄も
蝦夷や千島の　果迄も

男を焦るゝ心もここまで、上らなけりや本統ではない。

來いよ來いよと　待つ夜は來いで
待たぬ夜さ來て　門に立つ

打ち合せに手ぬかりがあつては、飛だ馬鹿を見ることもある、來いといふ夜は、何を差し置いても行かざなるまい。

烟草一葉が　千兩シヨと儘よ
樣の寐烟草　絕やしやせぬ

亭主の好きな酒を減じ、子供の敎育費までも吝嗇して、只管に三越や白木へ行きたがるのが現今の女房氣質と聞いてゐる、それに何んぞや『烟草一葉が千兩しやうとも亭主の好きな煙草を斷らすものか』とは、ても見上げた貞女ではあるわい、拙者本來獨身主義だが、こんな女ならば、歡んで妻にも持ちたい、

さらば、酒代にも困るまい。

絲を取るなら　斑無く細く
　　可愛い男の　夏羽織

此所にもこんな親切な女がゐる、可愛い男に情立てる女の心意氣は、かうもあるものかと感じ入る、こんな女に一生に一度は、惚れられて見たいものだ。

これと同じ心の唄で次のやうなのもある、

三月食はでも　三年着でも
　　殿に着せ度い　紗の羽織

着想は前二首と同じである、いづれも戀人に對する女子の意氣を唱つたのであるけれど、措辭の巧妙なる、學者も及ばざるほどの旨味がある。

辛苦島田に　今朝結た髪を
　　樣が亂しやる　是非も無い

『是非も無い』の一句に、この唄の無限の趣味が讀める、日髪日化粧も、紅鐵漿の裝ひも、思へば樣への心中立てである、おやさしい樣のお氣にだにいらば、妾や、體も心も差し上げたい。

主の來る夜は　宵から知れる
　　たし扱帶が　空解ける

元祿の遊女が唱ひ流行らせたものらしく思はれる、戀と戀とには、精神の感應がある、扱帶の空解けもあらうか、やさしい可作である。

優美な唄では、

生まれ來たりし　古問へば
　　君に契れと　夢に見た
闇夜なれども　忍ばば忍べ
　　伽羅の香を　知る邊にて

若も道中で　雨降るならば
　私が涙と　思はんせ

いづれも優美な女性美と、男に寄する情想美とが發揮されてゐて、その時代の女性の情趣を偲ばしめる。

戀には伴ふ逢瀬の首尾の苦勞、戀する人の經驗する所である、俚謠にも唱はれてゐる、五六首列べて見やうなら、

呼ぶに呼ばれず　戸は叩かれず
　柱抱いたり　空見たり

逢ひに來たれど　戸は叩かれず
　唄の文句で　悟らんせ

用があるとて　呼んだは嘘よ
　お顔見たさの　謀

晩に忍ばば　裏から忍べ
　表八重垣　錠下りる

宵の明星さんを　夜明けと思ひ
　殿を歸して　今悔し

月夜鴉を　夜明けと思ひ
　主を歸して　後悔む

いづれも逢瀬の首尾と、逢ふて別れの辛さを唱つてゐる。

○

お三何にヨする　行燈の影で
　可愛い男の　帶紮る

詩でも和歌でも俳句でも、机上の作には神來の興趣がない、天保以後の「都都一」から、殊に明治最近の「都々一」になると多くは机上の作なので、この

『お三何にョする』といつたやうな自然の聲を聞くやうな氣呵がない、必ずしも昔のものが好いといふ譯ではないけれど、自然に出た唄と、態と作つた唄とは氣品に相違のある筈である、今この唄などは宛然談話體で、何等苦心工夫のないやうで、而も『行燈の影で帶紬る』といふ文字に無量の床しさが浮動して一篇の小説とも見られる。

暇ぢやと言て　差櫛吳れた
心解けとの　差櫛を

傑作である、女が男に對する心中立てを唱つたものの多い中に、これは幾分悲觀の心理が讀まれてある、差櫛を貰つたのは嬉しいけれど、これが別れの記念ともなるのかと思うと、女の身には氣が氣でない、今まで仲宜うしてゐながら、急に別れ話しを持ち出した男の心が解しかねて、怨めし相に差櫛見る眼から、涙がこぼれてゐる。

紺の服紗に　鬢迦羅迂めて
落す振りして　君に遣る

大宮殿中の女官、男を見る甚だ稀、今日彌生春の半、偶々觀櫻の宴を催されたゝ、宴には數多公達のその中に、去年の歌合せから忘れがたなの彼の君は、一段と氣高う見え玉ふ、無下にいひ寄る由もがな、埒も無う廊緣を彼ちに此ちに、氣もそぞろ、偶と足音す、振り返へればその君なり、振袖より取り出したるはかねて用意の服紗包み。

殿を持つなら　村一番の
太鼓叩きか　笛吹きか

やさしい唄の中に、こんな威勢の好いのもある、その頃の田舍娘の意氣が面白い、今日の我等には多少の滑稽味を感じしめるほどあど氣ない希望が面白いこれを現代の娘に作り替えさしたら『旦那持つなら、淺草一の、壯士役者か、

活辯か』かうもあらうか。

沖の瀬の瀬の　瀬で打つ浪は
可愛い男の　度胸試し

『度胸試し』の一句が、この唄の生命で實に千金の重がある、こんな健氣な女に可愛いがられた壯丁は、角力でも喧嘩でも人に負ては濟まない、古へから『色男、金と力はなかりけり』といひ傳へられてゐるけれど、それも相手の女次第だと見える。

これで大體は選んだ積りであるけれど「時代知らずの俚謠」の中で、私の最も好きなのは。

君と寐やうか　五千石取ろか
何ンの五千石　君と寐る

虚榮病に犯されたる現代女性が、物慾に眩し、權勢に魅せられ、形示表面の榮華に心醉し迷惑して、あたら半生を闇黑に葬るの犧牲者あるを見聞する毎に我等は必らず『何ンの五千石』を吟嘯せざるは莫し、女性の魂は貞操に在り、貞操は金權以て買ふ能はず、能はざる所に貞操の價値あり、黄金山と積まるとも、思はぬ人に身を托さんか、これ自棄するなり、貧するも戀せる男に情を立つ、戀の眞なるものなり、威張る男を振つて、正直者に靡く美人の史談あり、讀んで痛快を感ず、この唄同樣の愉快あり、維新前と覺ゆ、神奈川巖龜樓の遊女喜遊の『露をだに、厭ふ大和の女郎花、降る亞米利加に、袖は濡らさじ』の句あり、古來日本女史の意氣、温和の中、甚だ嚴肅なる者ありき、近時の女子は只金錢の前の翫弄と異る莫し、女子自覺の機、今の時に非ずや。

涼し曙　蓮吹く風が
紹蚊帳一人の　夢醒ます

この頃のやうに屋根瓦が炎えさうな暑中、私のやうに、深川の豚小屋同樣の

茅屋に蟄居籠城してゐても、この唄を三遍唱ふと、冷氣兩腋に生ず、暑さ忘れの唱である、後二句の修辭美、稀に見る所、秀逸といふべし。

沖の鷗に　汐時問へば
儂や立つ鳥　浪に聞け

思慕相愛の情緒を述べたものではないけれど、情趣の籠つた句である。

いつぞやのこと、竹越三叉氏の談話が雜誌に上つてゐたのを記憶してゐる、といふのは、同氏は曾て須磨、舞子の濱に遊び、船頭がこの『沖の鷗に』の唄を唱つてゐるのを聞いて、斯かる情趣ある國の歷史を研究したら、嘸興味のあることだらうと感じたるが、彼の「二千五百年史」著作の動機であつたといふ、眞にこの思ひあらしむるに足るの傑作である。

丁と張らんせ　若し半出たら
妾し賣らんせ　吉原へ

女子の心意氣を唱つて、此の如く大膽なるは稀なり、この唄その形式の如何文字上の如何は問ふ所にあらず、江戸時代の江戸ッ兒女性の氣魄を吐きて、氣燄萬丈の偉觀あるを憧憬する者なり。

三三、戀愛以外の俚謠

思慕戀愛の情緒を唱ふのを生命とせる俚謠子にも、道學先生達が、アッとばかりに驚かれるほどの道話的、敎訓的の唄がある、先づ『隆達節』に、

梅は匂ひよ　立木はいらぬ
人は心よ　姿はいらぬ

といふのがある、單純な比喩を以て道話を流行唄に仕組んだまでで、別に取り立てていふがものはないけれど、俚謠子にこんな文句のあるのが、寧ろ不思議なほどに思はれる、古人は兎角く道話的な思想を持つてたものと見えて、昔の

『今様歌』に『柳の姿、月の眉、花の顔何かせん、松の操を守れかし』とかいふのがある、形は違つてゐるが心は同じである。

これと同じ思想の唄が『諸國盆踊唱歌』にもある、

梅は匂ひよ　櫻は花よ
人は心よ　振りいらぬ
流行る簪　髪容より
直な心が　美しい
髪を島田に　結ばうより御方
心島田に　持ちなされ

更にまた、

人の振見て　我が振直せ
櫻花見て　色直せ（時代不知）

男伊達より　金より心
心さへ善けや　振りいらぬ（時代不知）
眉目が好いとて　心が人か
大阪木偶の坊で　面ばかり（諸國盆踊唱歌）

皆同一思想である、容貌よりは精神、外見よりは實質を重んぜよとの教訓歌、俚謠でこんなお説教を聞かうとは、恐縮に存ずる。

『弄齋節』にも教訓の唄がある。

物を言やるな　言や屑になる
言はで包めば　屑も無い

古人曰く、口は禍の門と、無口では困るけれど、直ぐ化の皮が脱げたり、後で赤い顔をせねばならぬやうなことも感心せぬ、『物いへば、唇寒し、秋の風』と同じ意味である。

この唄と似寄つたのが他にもある、

人に物言や　油の雫
落ちて廣がる　何所までも（時代不知）

人の口には　戸が立てられぬ
流れ川には　堰ならぬ（時代不知）

「油の雫」「流れ川」など比喩に取つてゐる所に、この唄の原始的調子が見える一歩進んだ教訓を唱つたのに、

鮎は瀬に着く　鳥は木に留まる
人は情の　下に住む（諸國盆踊唱歌）

といふのがある、同情を唱つた俚謠子としてはこれなどは、傑作である、俚謠としいはゞ野卑なものとのみ思ひ込んで居る人々も、こんな俚謠のあるを知つては、餘まり莫伽になさるなよ。

人を使はば　川の瀬を見やれ
淺い瀬にこそ　藻が留まる（諸國盆踊唱歌）

雨よ降り止め　お寺の側の
柿の樹蔭に　雉子が啼く

いづれも同情を唱つた唄である、この思ひ遣りの心が淑雅の情となつて、

上を思へば　限りが無いと
下を見て　咲く　百合の花

といつたやうな、優婉な詩想となつて現はれた。

更に孝道を唱つた俚謠を調べて見やうなら、親は子を養育する義務がある、けれど、賴んで產んで貰らつたのではないから、子は親に盡す義務は無い抔といふ若者もあるといふが、そんな人達が見たら喫驚するやうな難有味たつぷりの考道歌を披露しよう。

親といふ字を　繪に書いてなりと
肌の守りと　拜みたや（弄齋）

親は此の世の　油の光
親が御座らにや　光無い（諸國盆踊唱歌）

親が片親　御座らぬ故に
人も嘲づりや　身も痩る（同上）

親は子と言て　尋ねもするが
親を尋ぬる　子は稀な（同上）

親の意見と　茄子の花は
千に一つも　仇が無い（時代不知）

死んで行く時や　如來樣たより
娑婆にゐる時や　親たより（同上）

他人恐し　闇夜は怖い
親と月夜は　始終も好い（同上）

月と日と　親と子供と　馴染と鏡

何時も見立てて　眼に厭きぬ（同上）

親の無い子を　見る度び思ふ
親は生きたる　神佛

寒や小寒や　山から來ても
親ぢやなければ　茶も呉れぬ

昔の人の、親を思ふ情趣を見る可し、彼の、

親に會ひ度か　立木を見やれ
嵐雪吹の　する夜さに（時代不知）

の如きは、宛然一部の孝經である、孔子の思想の傳來して、『樹、靜まらんと

欲すれども風やまず、子、養はんと欲すれども、親ゐまさず』とかいつた難有い文句の飜譯でもあらうか、末世繞季、人心日日に荒み、道心年々に微なるの故にや、明治の世に至つて、落語家寄席の高座に唱つて曰く、

食ッても食ッても　飽き無い者は
米の飯に　親の脛（明治）

更に又、親と子と、嫁と姑と、夫婦間幷に主從の心理を唱つた教訓歌を選んで見やなら、

夫の留守に　人寄せせぬは
さても見上げた　花嫁子（諸國盆踊唱歌）

野でも山でも　御主様よかれ
お主のお蔭で　世に出でる（同上）

知つてをれども　人に又問ふて
母の差圖で　迎ひとろ（同上）

飽きも飽かれも　せぬ中なれど
暇遣ります　親故に（同上）

嫁を可愛がれ　嫁こそかかれ
娘他國の　人の嫁（同上）

嫁を〳〵と　嫁譏りやんな
譏る我が子も　人の嫁（同上）

野にも山にも　子無きはおきやれ
萬の藏より　子は寶（同上）

假令姑が　鬼でも蛇でも
お前育てた　親ぢやもの（明治初年）

親と親との　約束なれば
　嫁かにやなるまい　戻るとも（時代不知）
いとし我が子も　嫁取りや憎い
　嫁は前世の　敵やら（時代不知）

三四、俚謠子また人生を唱ふ

俚謠に一貫したる生命は、男女戀愛の情緒にあるは論無けれども、如上教訓歌あり、孝道歌あり、俚謠子取材の範圍は極めて弘く、凡そ世相人事の表裏は古人これを道破せざる莫し、されば、これを心讀悟了して、人情の骨髓を捕促すといふ、宜なり、「人情哲學」の名あるや、乃ち、その如何に人生を唱ふかを聞き玉へ。

岩井町とは　誰が名附けしぞ
　金が無ければ　つらい町（諸國盆踊唱歌）

金の無いほど辛いことはないと、つくづく思ふ、我等は、昔は嘸呑氣だつたらうと思つてゐたが、昔の流行唄にこんなのもある、今も昔も、金の無い奴は、悲慘ではある。

山椒胡椒より　辛いものは世帶
　ならぬ世帶は　猶ほ辛い（同上）

御尤も至極の愁訴だと首肯かれる。

明くれば出て　暮るるまで
　身は粉になると　裸麥（同上）
朝は朝星　夜は又夜星
　晝は野端の　水を汲む（同上）

稼ぐに追ひ附く貧乏無しといふけれど、稼いでも〳〵、貧乏神に取りつかれて大抵の人が逃げ道の無いので弱つてゐる、稼がずにゐたら食へず、食はなけや死んで仕舞ふ、人生は辛いものではあるわい。

深山六月　布子を着るは
金が無いやら　冷ゆるやら（同上）

皮肉味、諷刺味、俚謠子獨特の壇上。

池田伊丹の　上諸白も
錢が無ければ　見て通る（同上）

千部萬部の　經文よりも
金が好い（時代不知）

わたし「や一分の
然り、然り、眞に然り、錢無くんば、正宗芳醇の香も、鼻頭舌尖の壓迫のみ苦痛のみ、八萬四千の法文、功德無量なりと雖も、卓上一片のパンと空腹を癒する何れぞや、哲人往々物慾を擯斥し、神靈の尊重を說く、吾等も理想のみは哲人を眞似得ん、されど我等の肉體の生理的組織はパン無くして活くること能はざるの危あり、拜金か、これを知らず、現實は理想と一致せず、衣食足つて禮節を知るとかや、先づ現生を握つて、然る後に徐ろに念佛も申し、慈善も行ひ世からも人からも譽めらるるの人とならんかな、呵々。

何時か鴻の池の　米蹈み仕舞ひ
播磨灘をば　唄で遣ろ（諸國盆踊唱歌）

勞働の後は、何物かの報酬あるべし、くよくよせずに、働くこと〳〵。

夫耕へす　娘はかせぐ
妻は瀨戸へ出て　米炊ぐ（同上）

人生を樂觀す。

ひさご屑屋に　蚊遣りを炷きて

綾や錦と　夕納涼（同上）

『樂みは、夕顔棚の、涼み哉』無病健全、和樂團欒の家庭あり、金殿玉樓、必ずしも羨むに足らず。

渡り較べて　世の中見れば
阿波の鳴戸に　波も無し（投節）

俚諺に「渡る世間に鬼は無し」といふがあり、人生必ずしも冷酷ならずと解する人と、慘風悲雨の人生と較べたら、鳴戸の波浪も何んの物かは、人生辛しと解する人もあり。

庄屋の内儀の　紅裏小袖
地下の百姓の　血の涙（時代不如）

貧民生活の苦は、恐ろしや、這個の詩を産出す、この唄甚だ古くより傳はると思はる、この一首審かに説明せんには、帝國大學社會學教室の壇上に立たず

んばあるべからず、この唄、着想措辭の優れたる以上に、時人の思想を刺激し衝動する所淺からず、嗚呼、古人の怨み、また今人の怨みかな。

昨日や今日まで　水仕の女
今は二ケ所の　藏の主（弄齋）

俚謠に斯ういつた思想のものは甚だ乏しい、前の唄と同一思想では無いけれど、似寄つた所もあらうかと思つて並べて見た。

さうかと思ふと、人生を樂觀して、甚だ快活な調子を唱つたのもある。

呑みやれ歌やれ　先きの世は闇よ
今は半ばの　花盛り（弄齋）

狩場の鹿は　明日をも知らぬ
戯れ遊べ　夢の憂世に（弄齋前後の唄）

この唄は餘んまり健全な思想では無い、但し、死ぬるまで遊んでゐられる身

なら、これほど結構なことはないかも知れぬ。

現か夢か幻の　身を持ちながら
遊べや謠へ　酒呑みて　（同上）

現實の詩、樂天の歌、酒は百藥の長、人間憂悶の苦を拂ひ、歌は延壽の法、紛々俗事の煩を忘れしむ、この唄「弄齋」時代の古調、たゞその思想を取る、何にはともあれ、呑んで歌はうでは御座らぬか。

三五、俚謠の修辭美

天眞無飾、率直露骨なる所に、俚謠の特色があつて、文字に技巧を弄したものは、厭味に感じられて俚謠的興味を殺ぐのであるけれど、中には和歌をだにも凌駕せんばかりの優婉雅典の麗はしい句調がある、今心附いたものを擧げやうなら、

我れは菖蒲の　ねにこそ泣かめ
引くな袂の　露けきに　（古今百首なけぶし）

更けて砧の　音より聞けば
月に落ち來る　我が涙　（同上）

雨の降る夜は　一味床し
いつに愚は　無けれども　（同上）

衞士の焚火は　夜こそ燃ゆれ
胸に焚く火の　絶えやらぬ　（同上）

最ど淋しき　寐覺めの床に
涙な添へそ　杜鵑　（同上）

これも流石に　哀れる添ふる
小田の蛙の　暮の聲　（同上）

『古今百首なげぶし』の唄は、すべて和歌の作り替へかとも思はれるほどに優美である、優美なるが故に、熱情の乏しきは是非も無い、この外に、

君に別れて　松原行けば
松の露やら　涙やら（潮來節）

春の鶯　何を着て寢やる
花を枕に　葉を掛て（維新前の唄）

庭に遣り水　燈籠に火影
夏の小座敷　釣り葱（時代不知）

抔は措辭の上から見て、綺麗な唄である。

三六、情趣深き俚謠

俚謠本來の性質として、矢張人情を唱つものに、傑作があるは自然の道理である。

些か理屈に近い嫌ひはあるけれど、

逢うて立つ名が　立つ名の中か、
逢はで立つこそ　立つ名なれ（弄齋）

思ひ出すとは　忘るるゆゑよ
思ひ出さぬよ　忘れねば（同上）

思ひ出せとは　忘るるからよ
思ひ出さずに　忘れずに（諸國盆踊唱歌）

の如きは、人口に膾炙した唄である、『思ひ出さずに、忘れずに』を吉原三浦屋

二代目高尾太夫の創見のやうにいふ人もあつて大層難有がる人もあるけれど、この太夫が仙臺綱宗公に送つた玉章の文句といふのは、

「ゆうし浪の上の御通せの後、御舘の首尾如何あらんと、忘れねばこそ、思ひ出さず候〳〵もし

君は今、駒形あたり、時鳥」

といふのであるが、この『忘れねばこそ、思ひ出さず』の二句は、辨の内侍が夫に死なれ、哀しんで詠んだ歌に、

「去年とても、過にし今日の、今とても、忘れねばこそ、思ひ出さず」

といふのがあつて、高尾がこの歌を上手に應用したものだといはれてある、こんな考證説が傳はつてあるだけ　非凡の名句たることも分る。

君は今頃　駒形あたり

聲も高尾の　そそり節（時代不知）

定めし三浦屋全盛の頃に流行した唄だらうと想像される、寛濶な元祿風で、兩手を袂にして、落し差しの意氣な武士の面目が活躍す。

千里胡沙吹く　風さへ絶えて

淋し馬子唄　冬の月（時代不知）

たゞ叙景には過ぎぬけれど、シベリアの野でも唱ふ程の、大きな光景の中に、馬子唄と寒い月とをあしらつた所に、いふべからざる詩想を思はす、調甚だ高し。

雪は散ら散ら　夜は深々と

男涙で　貰ひ乳（時代不知）

よく二上りで唱つて、情を搖動る唄である、宛然一篇の小説である。

長い刀の　下緒に縋り

またいつ逢ふやら　逢はぬやら（時代不知）

古い調でも無いが、都々一調でも無い、嚴めしい『長い刀』の照對に、涙を流す弱い女の取り縋つた、戀々の情致に、この唄の高手を認められる。

儂は歌好き　念佛嫌ひ
死出の山路も　歌で越す（時代不知）

私も日比この覺悟を持つてゐる、唄としては秀逸では無いが、その思想に、何んともいへない面白味がある、實際、念佛申す暇があつたら、都々一でも唱つた方が體の爲めにも好い、精神も確かりする、威勢の好い唄ではある。

《終り》

新刊

田村西男作
春情色くらべ　五十錢

鈍太郎編
元祿笑話　二十五錢

井淵柳影著
遊女の文學　六十錢

岡鬼太郎作
花柳春話
合三味線　五十錢

鶴津大椽述
義太夫の心得　三十錢

雨谷一柴庵著
川柳かい　二十五錢

好評

大正二年五月五日印刷（俚謠奥付）
大正二年五月十日發行　定價金五十錢

著者　湯朝觀明
東京市神田區仲町二丁目六番地
發行者　中島卯三郎
東京市京橋區新榮町五丁目二番地
印刷者　山内鍬次郎

不許複製

發行所　東京神田仲町　辰文館
電話下谷五百九十五番
振替東京一六八五九番

賣捌所　全國各地書店に販賣す

○好家必携の寶典

小泉迂外君著●鳥居清忠畫伯裝畫

芝居かぐみ

〔各劇場男女新舊俳優の寫眞數葉挿入〕

四六判全一冊
頗美麗裝幀
正價金三十錢
送料金四錢

内容目次

▲歌舞伎の濫觴
▲劇場の等級
▲劇場の構造と其名稱
▲重役なる者の座階級
▲役者の給金
▲役柄の名稱
▲狂言と作者
▲正本と書抜
▲振付の扱方
▲柏子木の扱方

▲開場の順序
▲狂言の種類
▲歌舞伎十八番
▲歌舞伎の演劇
▲新古の說明
▲綿衣の裝
▲化粧の仕方
▲隈取の專
▲六方とタテ
▲大道具のいろ〳〵
▲凝物

▲小道具のいろ〳〵
▲氣の光線と應用
▲芝居風と勸善懲惡
▲板と番付
▲鳥居風と學校
▲劇通と評記者
▲見得と劇評
▲重なる物の案內
▲なるの新舊俳優
▲芝居の內幕

以上芝居道の事柄を一々詳細なる說明を附して讀み易く總振がなを附しあれば何人と雖も此書一讀せば直ちに劇通と成る得べし

社交上本書を見ざる士女ありや‖

岡鬼太郎君著　鏑木清方君裝畫と口繪

現代式花柳小說

花柳春話

全一冊四六判
口繪木版彩色刷
定價金五十錢
送料金六錢

花柳文學の組識せる著者が得意の才筆により、粹な師匠の戀は江戸式を發揮し肩上を取つた斗りの內氣な藝者の岡惚を寫し、料理屋、待合、女中等の批判は江戸式の氣焰を揚げ年增藝者の情人となつた男の心持を描き更に上流士女の暗面諸藝人內幕を目に渚ぎるが如く書いたるは意氣か野暮か兎に角艶中の怪書堅氣も讀むべく通も又讀まざるべからず

情と戀は本書中の花なり

花柳文學の精華は本書に收む

田村西男君作

（鳥居清忠君挿畫と口繪）

藝者	一〇一	送料六錢
又藝者	一〇一	送料六錢
藝者新話	一〇一	送料六錢
藝者花競	一〇一	送料六錢
藝者五大嘶	一〇一	送料四錢
半玉	一〇一	送料六錢

好評又好評又又好評

本書は花柳文學の泰斗たる西男氏が艶麗なる妙筆により現代藝者の生活と戀とを表から裏ら横から縱からいろ〳〵に描寫せられたる現代の人情本なり

讀んで居る内に自ら丹次郎になるやうな氣がして來て面白く可笑しく嬉しく悲しくじれつたく僅か五十錢の本代で身代の三ツも潰した位ひの、情味を味ふことの出來得る德用の本なり

『大門を素通にする粋な客』眞の粋は此本見て本當の藝者買はよすこと〳〵

本書は現代の人情本なり

388
149

辰文彼

338
149

終